

奈良・平城京左京（外京）五条五坊七坪

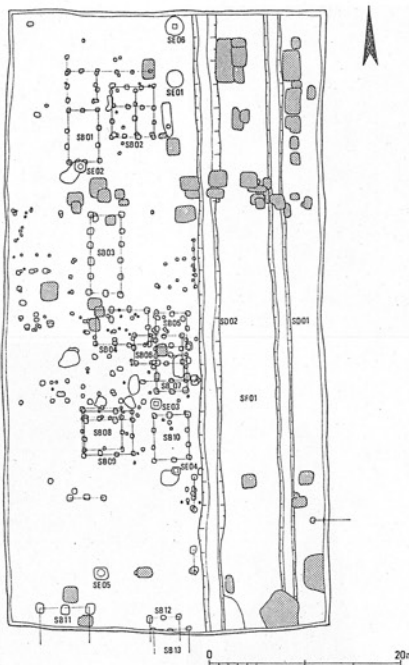
- 1 所在地 奈良市西木辻町四七番地
- 2 調査期間 一九八〇年（昭55）九月九日～十二月十六日
- 3 発掘機関 奈良市教育委員会
- 4 調査担当者 中井 公・西崎卓哉
- 5 遺跡の種類 都城跡
- 6 遺跡の年代 奈良時代
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

本調査地は、平城京の条坊では、左京（外京）五条五坊の七坪と十坪とにまたがる地域に相当する。ビル建設に伴なう事前の調査で、発掘面積約二四五〇m²に及ぶが、外京城においては、従来、寺院を除いてはほとんど調査の例がなく、本調査が、はじめての本格的な発掘調査ということになる。

調査の結果、検出した主な遺構は、七・十坪間を画する坊間路と七坪宅地内の掘立柱建物一三棟・井戸六基などである。坊間路は、素掘りの東西両側溝を有し、その心々間距離は、八m強を測る。この幅は、三丈（三〇尺）の計画尺であったとみられるが、三丈の幅員で計画された坊・条間路は、これまで知られていない。一方、七坪内の遺構群は、柱穴の重複関係や建物間隔からみて、四時期にわた

る変遷がとらえられる。ただ、いずれの時期においても、坪内部を地割りする明確な施設の痕跡は認められず、二間×三間程度の小規模な建物が雑然と配された状況にすぎない。こうした坪内の宅地の様相は、従来、宮域に近い範囲で確認された幾多の整然とした大規模邸宅の様相とは大きく異なるものである。今後の京城解明に待たねばならない点は甚だ多いが、本調査地に、あるいは庶民階層の生活空間のような性格を想定して置くことも無駄ではなからう。

さて、木簡が出土したのは、発掘区南端で検出した奈良時代後期の井戸SE〇五からである。この井戸は、一辺約二mの方形掘形をもち、針葉樹の株木を縦に二分割し、その内部を刳貫いて再度組合



平城京左京（外京）五条五坊七・十坪
検出遺構配置図

わせたものを井戸枠に据えている。枠材の組合わせは、外周に巻いた縄もしくは蔓との隙間に、三箇所を楔を使用して仕口を締結しただけの簡単なものである。枠各部の寸法は、上部内法径八二cm・底部同径六八cmで、長さ一六九cmが残存、厚さ五一二cmを測る。刳貫き材を井戸枠に使用した例としては、宮・京域内を通じ、宮第二次内裏東側築地回廊の井戸SE七九〇が知られるにすぎず、本例は、新しい資料を加えたことになる。

木簡は、井戸枠内の底部近くから、「平城宮V」相当の土器類と伴出し、他には、削りかけ・箸・曲物などの木製品、土馬、鉄斧の出土があった。なお、土器類の中には、「人」「用」と墨書されたもの二点が含まれていた。

8 木簡の釈文・内容

(1) 「山」
[下倉カ] 人豆主

(216)×38×7 061

(2) 「道道」

道道

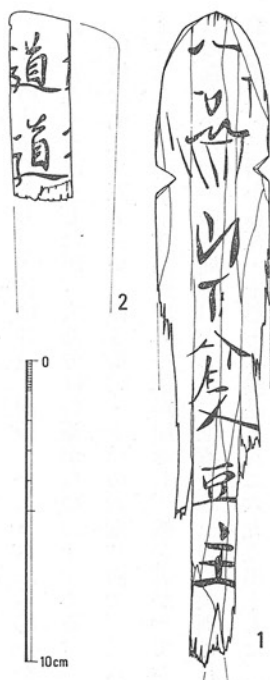
(63)×(9)×1 065

(1)は、人形の胸部に墨書された人名で、この人形には、他に眉毛・鼻・口・髭の表現が認められる。人形に記された人名で判読が可能な例は、これがはじめてである。(2)は、習書の一部と考えられるが、先端が切先状に加工された檜の糸柁の薄板が使用されており、檜扇の骨の末の部分にあたる可能性がある。

(中井 公)



井戸 SE05 使用の井戸枠



井戸SE05出土木簡 (人形・檜扇?)